

Withコロナ 神奈川工科大学

～新たな生活様式でも安心して学べるキャンパスライフを目指して～

学生の発想力を拡張する「KAIT広場」が竣工

学科TOPICS

卒業生の活躍

Office Information





Withコロナ 神奈川工科大学

～新たな生活様式でも安心して学べるキャンパスライフを目指して～

新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の事態によって、私たちの生活は依然として危機に晒されています。本学では、2月3日に学長による「注意喚起」を発出し、以降学生の安全と健康を第一に、可及的な対応を進めて参りました。今回は、本学におけるこれまでの対応についてお知らせするとともに、これからの「Withコロナ」の時代を見据えた取り組みについて、「安心して学べるキャンパスライフの実現」をテーマにお伝えします。

(編集部取材による2020年11月19日現在の状況です)

授業の対応

～「原則オンライン授業」から「オンラインと対面の併用」へ～

＜前期授業期間中の取り組み＞

本学では今年2月3日に「新型コロナウイルスへの注意喚起」として第一報を発出。同17日には第1回「新型コロナウイルスに関する連絡会」を開催、同20日にはこの連絡会を「新型コロナウイルス感染症対策室」へ発展させ、対策会議を随時行う体制を整備しました。

3月実施イベントの全面中止決定と並行して、新学期の対策についても検討を進めました。3月末時点で前期授業開始日の後ろ倒しを含む学年暦の変更を行ったものの、同時期に全国各地において感染拡大が本格化したことを契機に、4月7日に政府から緊急事態宣言が発令されました。その前日となる同月6日には、授業開始日をさらに後ろ倒しにする学年暦の再修正、さらに同月17日には前期授業をまずは5週間オンライン授業中心で行う方針を告知しました。

工科・医療系の大学では、実験・実習が日々の学びに欠かせません。また本学では学びの充実を見据えたアクティブラーニングを推進してきた経緯があります。このオンライン授業の決定に際しては、本学においても何とか対面での授業を行う方法を模索したものの、遠・中距離通学する学生や大学近隣住民の方々への影響を考慮して、最終的な決定に至りました。そして4月末からオンラインのオリエンテーションを、5月11日から前期オンライン授業(大学院は、5月18日から)を開始しました。

そして6月4日には対面授業の開始などを判断するための行動指針を策定し同19日より指針「レベル3」として、大学院生や卒業研究着手学生、および国家試験対策上必要な実験・実習・演習等で許可された学生を除いて、オンライン授業を原則中心とする形で、

前期授業を展開しました。また、9月上旬に約2週間にわたって前期集中授業(対面式)を行うことを決定した後、8月22日に前期授業期間を終えることになりました。

レベル	行動指針(授業に係わる概要)
5	全学オンライン授業のみ
4	原則オンライン授業 大学院(博士後期及び博士前期2年)、 国家試験対策上必要な実習は入構可
3	原則オンライン授業 レベル4に加えて、大学院(博士前期1年)、 学部4年(卒業研究着手者のみ)は入構可
2	原則オンライン授業 レベル3に加えて、学部1～3年の実験・実習は入構可
1	原則対面授業 感染防止拡大に注意して授業の実施、オンライン授業の併用可

※レベル4・3・2においては、一日当たりの入構人数に上限を設けております。

<後期授業期間中の取り組みとこれから>

9月上旬には学科や学年を分散させる形での登校・対面による新入生ガイダンスと、前述の前期集中授業(対面式)を実施。また9月2日には後期の対面授業における登校自粛の申請を受け付ける旨(健康医療科学部を除く)をホームページにて案内しました。多くの大学が個別の特例として学生の登校自粛に対応する中で、学生への手厚い対応としてマスコミからも注目を集めました。

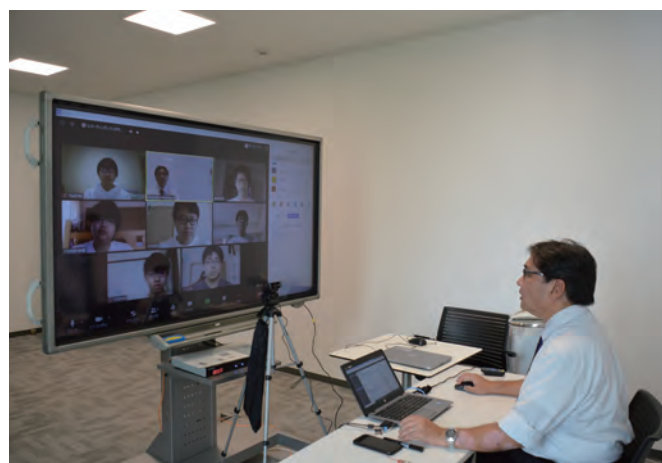
後期授業開始日となる9月25日には指針「レベル2」に移行し、オンライン授業と対面授業の併用型の授業を開始し、全体の9割を超える学生が分散して入構しています。オンライン授業に関しては、コロナ禍以前から学習効率および効果の高さが注目されていましたが、学生の活発な質問・意見を引き出せることや動画教材の活用など、オンラインだから実現できるメリットを活かしつつ、単なる対面授業の代替ではなく、質の高い学びを実現する方策として、対面授業と併用での活用を模索しております。

なおKAIT工房、KAITアリーナトレーニング室、



室内換気を行い、距離をとって実施しています。

KAITフットボールフィールド(グラウンド)は、10月から予約制での利用を開始し、附属図書館については5月時点で電子図書館サービスや郵送貸出サービスを展開するなど迅速な対応を行っており、9月からは登校日の入館利用を、10月からは予約制による登校日以外の利用拡大もスタートしています。



オンライン授業の様子

<学生を支える多角的なサポート>

授業の面ではオンライン授業と対面授業の併用が徐々に定着する一方で、学生サポートにおいてはまだまだ課題が存在しています。SNSを利用して学部1年生でもコミュニケーションの輪を広げるなど柔軟に対応できる学生は多いですが、それでも学生同士の交流で悩む学生がいることも課題として認識しています。

特にメンタルヘルスケアについては、危機感を持って取り組んでいます。学生相談室では早期からオンラインによる相談(カウンセリング)をスタートし、必要に応じて緊急事態宣言下でも保護者と本人の了承のもと、対面によるサポートを行ってきました。また学生サポート室では、履修登録や日々の勉強でつまづいている学生の悩みに対応しています。本学としても、メール等で学生への積極的なコミュニケーションを図っていますが、どうしても学生から上がる声に頼る部分は否めず、その点については保護者の皆様にもご協力の上、学生とのさらなるコミュニケーションをお願いしたいと考えております。コロナ禍に対応したサポート体制整備を図り、学生の異変について学内での情報共有も行っていますが、保護者の皆様の気付きを大学と共有いただくことが、本学が学生にできるサポートにつながっていきます。

キャンパス内の感染症対策

～学生の安心・安全を第一としたキャンパス内の感染拡大防止の取り組み～

対面による授業の再開に際し、本学では学生への健康管理上の要請として、入構時の検温・体調確認、飛沫対策やソーシャル・ディスタンスの確保まで、施設面での感染症対策を徹底しています。

各施設での取り組みはホームページに掲載しておりますが、学生は入構後、「検温・体調確認ステーション」を必ず通過する仕組みとしており、そこで体調不良が見られた場合は、健康管理室(分室)で看護師による体調確認を行います。体調確認において、医療機関での受診が必要な場合には、同窓会からの寄付による感染防止対策が措置された専用車両にて病院まで搬送する体制も整えています。

キャンパス内では教室はもとより、ロビーや学生食堂の各種施設、移動通路に関しても消毒用アルコール類、ビニール、アクリル板、誘導掲示を活用した感染防止対策を実施し、教室内では約20分で空気が入れ替わる換気システムと窓やドアの開放を併用して換気に努めています。

また、通学経路での感染対策については、本厚木駅と大学間を結ぶ急行バスで乗車定員を縮小。公共交通機関の利用を避けたいと申し出る学生のために、これまで年間有料契約としていた学生用駐車場を無料とし、事前申請と予約制で1日単位での自動車通学を可能とする体制を整えています。



手指消毒後、サーモカメラの前に進みます。



サーモカメラで検温します。



学生証で入構を記録します。



確認が済んだ学生は、入構許可シールを見える位置に貼付



発熱等、体調不良の学生は、健康管理室(分室)で再度体調確認を受けます。



緊急経済支援の実施

～一人ひとりの生活不安を解消し、学びに集中できる環境を実現～

コロナ禍の社会経済へのダメージは、学生へも波及しています。本学では、奨学金制度の活用を主軸に多様な経済支援を行いました。

政府や厚木市からの公的な支援「学生支援緊急給付金」「学生就労等支援補助金」（厚木市）に加え、本学独自の奨学金を活用した取り組みは、既存制度の適用を拡大する形で展開。「幾徳学園奨学金」「緊急時奨学金貸与制度」「幾徳学園授業料貸与制度」は、無利子貸与制度で募集枠や対象学年の拡大、返還期間の延長、貸与金額の変更を行い、現在も支援を継続しています。

オンライン授業支援としては、貸与用のノートPC、タブレット、Wi-Fiルータを用意。特にWi-Fiルータについては11月6日時点で110名が利用しており、オンライン授業を受けるための環境整備に一定の効果を発揮できたと考えています。



また、特長的な取り組みとして他大学からのノウハウ提供依頼を受けたのが、学生向けの学内業務を創出し、アルバイトとして雇用する支援制度です。ここでは学生支援やオープンキャンパス業務の補助、オンライン授業の評価といったオンラインでできる業務を新たに創出。6～8月の3か月間にわたり計248名の学生を大学が雇用し、支援しました。



学内アルバイトとして制作されたコロナ対策動画



【神奈川工科大学のコロナ対策】
こちらから動画がご覧いただけます

「Withコロナ」に向けた取り組み

約5,000人という学生規模の大きさやキャンパスの広さから、万が一感染者が出た場合に濃厚接触者の特定が難しいという大学独自の環境が存在します。また、大学周辺住民の皆様への影響も配慮しなくてはなりません。小中高で全面対面授業が再開される一方、クラスター発生のリスクの高さから大学で同様の施策が難しいことは、他大学も同様、日本における大学全体が抱える難題です。その一方でオンライン授業による学びの拡張など、コロナ禍がもたらしたものは、決してデメリットばかりではありません。「Withコ

ロナ」の時代において、あらゆる業界で“ニューノーマル”の実現が望まれています。本学もその時代を開拓していくための施策を、今後もスピード感を持って取り組みます。

改めて、「学生本位主義」～すべては学生のために～ということを意識し、学生のために、より充実した学びを、より安全な環境で展開するためにも、引き続き、学生および保護者の皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

TOPICS 機械工学科

理想的なマスクに関する学生の学会発表

9月13日～16日、名古屋で開催された日本機械学会年次大会、流体工学の基礎と応用のセッションで、機械工学科の岩永正裕准教授、本学科4年生の大沼拓嗣さん、岩堀颯斗さん、大学院機械工学専攻1年生の清水健司さん、丸山健一郎さん、小倉大和さんの連名で、「3Dプリンターによる理想的なマスクの作成 Creating an Ideal Mask with a 3D Printer」と題する研究発表が行われました。これは、岩永先生のご指導による学部4年の卒業研究や大学院の「総合プロジェクト」の成果でもあります。新型コロナウイルス感染防止のため、外出時にはマスクを着用して生活せざるを得ない状況が続いていますが、本研究によって、市販のマスクを改良し、(1)眼鏡が曇らない(2)皮膚が痒くならない(3)吸入抵抗が小さい(4)流入流出する空気はフィルターを通る。という理想的なマスクが開発されました(図1)。3Dプリンターで作製したマネキン(図2)を用い、圧力損失や流量に関する流体力学的な測定が行われ、開発されたマスクは、市販のKN95マスク、水フィルターマスク、3層マスクと比較しても吸入抵抗の小さいマスクであることが実証されました。なお、研究発表講演会は、感染防止のためZoomを利用したオンラインでの開催になりました。

(文責：機械工学科教授 高石 吉登)



図1 開発された理想的なマスク

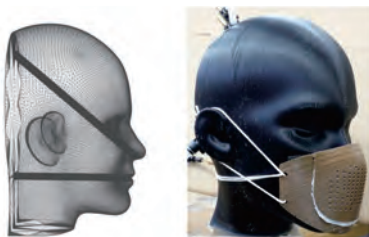


図2 3Dプリンターで作製したマネキン

TOPICS 電気電子情報工学科

新入生向けオリジナルガイダンスを実施しました

9月8日、9日に希望者を対象とした1年生E科オリジナルガイダンスを実施しました。このガイダンスは、3月下旬に中止になった「電気電子入門講座」の代わりとなるもので、オンライン授業の長期化に伴い、学生からは「学生生活に不安を感じる、友達が居ない」などの声が上がっており、そのため、ガイダンスを通して学生の不安解消と大学施設に触れる機会を持ってもらうことを目的に企画しました。このガイダンスの実施には、多くの本学科教員が協力し実施する事ができました。2日間とも学科定員半数の学生が参加しました。実施内容は、1日目が「はんだごて」を使ったマイコン回路の製作、2日目はテスターの使い方や太陽電池パネルを使った実験を行いました。2日目の太陽電池パネルの実験では、各班でチームを組み、互いに距離を取りながら協力し合い実験を行いました。この実験を通して、離れた状態ではありますが互いに会話をする機会もあり良い雰囲気でした。ガイダンスを通して、少しでも不安が解消し、今後の学生生活に弾みをつけて欲しいと思います。後期は、1年生の懇談会も計画しています。

(文責：電気電子情報工学科准教授 工藤 嗣友)



TOPICS 応用化学学科

新入生ガイダンスを実施しました

新型コロナウイルス蔓延の影響で、前期期間中はオンラインでの講義を主体に授業を行いました。後期では週に1回の入構日となり、少しずつですが、構内にも活気を帯びてきました。後期が始まる前の9月4日、新入生ガイダンスを開催しました。1年生にとっては、初めての登校となりました。教員の自己紹介と後期の準備のアナウンスを行うとともに、初めて顔を合わせる同級生に向けて、少しでもお互いに慣れてもらうため教員を交えたアイスブレイクなども行いました。また、学内見学も通じて、大学の様子を見ることができ、すこし緊張が解けた様子がうかがえました。現在、1年生は、学内で環境化学実験を受講しています。実験室では換気を保ちつつ、ゆったりとした環境で、環境分析に関連する実験に取り組んでいます。初めての大学、初めての実験で、慣れないことも多いと思いますが、少しずつでも友達を増やしていってほしいと願っています。

(文責：応用化学学科教授 高村 岳樹)



TOPICS 自動車システム開発工学科

新入生ガイダンスを実施しました

9月3日、自動車システム開発工学科では新入生ガイダンスを実施しました。

前期はコロナ禍で学生が入構できず、同級生や教員と直接顔を合わせる機会がなく、また大学や学科の各施設を見学する機会もありませんでした。

そこで学科の後期ガイダンスを開催し、履修修正に関する注意など教務関係の説明や、学科教員の自己紹介に加えて自動車工学棟や本学科の特徴の一つであるドライビングシミュレータなどの自由見学会を実施しました。さらに感染防止対策に気を配りながら密にならないよう小グループに分かれて別室で懇談会を行い(写真)、学生同士の友好関係作りを促しました。

また、当日の対面でのガイダンスを希望しない学生に対してはZoomによるオンラインガイダンスを併行し、一体感や参加意識を感じられるよう工夫しました。

(文責：自動車システム開発工学科教授 クライソントロナムチャイ)



TOPICS ロボット・メカトロニクス学科

「研究ブランディング事業」学生の参加活動

10月3日および17日、スポーツ施設におけるコロナ感染ガイドラインに則り、ITエクステンションセンターに設置したロコモサポートステーションにおいて、研究ブランディング事業の「健康」領域の測定会を実施しました。研究ブランディング事業の計測内容としてロコモ評価、生きがい調査、運動適性検査に加え、身体組成、骨密度、血管年齢、TUG、聴力測定を実施し、合わせて29名の中老年者の参加をいただきました。この測定には、ロボット・メカトロニクスシステム専攻の坂田大茂さんと本学科4年竹内海斗さん、基礎・教養教育センター高嶋准教授と情報学部上田准教授が測定スタッフとして参加しました。

研究ブランディング事業では、在学生に対しては、教員とともに地域課題解決に参加する等実践的な教育を目指しています。両学生は、測定したデータを基に、データの結果の説明や生活習慣へのアドバイスを積極的に行いました。

参加した中高年者の皆さんには、測定内容に満足いただき、結果に不安を抱いた方の中には、ロコモサポートステーションで実施している体操教室を予約される方がいました。健康データの「見える化」は、生活習慣を改善させる一つの方法であることがいえます。

(文責：ロボット・メカトロニクス学科教授 高橋 勝美)



計測方法を学生が説明しました

TOPICS 応用バイオ科学科

一部対面授業がスタート

9月7日から9日まで、1年生の化学・生物学基礎ユニットプログラムの実験を行いました。塩化コバルト水溶液を用いた平衡移動実験、水の硬度滴定および緩衝液実験と顕微鏡観察を3日間で実施し、当日のうちにレポートの作成も行いました。感染対策で、間隔を空けて実験を行いました。他の実験は2人ペアで行うところ、平衡移動の実験は1人で行いましたが、問題なく実施できているようでした。1人で実験することは少ないので、良い経験になったのではないかと思います。メスフラスコ、ビュレット、pHメータ、電子天秤および顕微鏡などいろいろな器具を使いましたが、正しく使うにはコツが必要なものもあり、大学入学後、初めての実験で難しく感じて戸惑いもあったかもしれません。また、実験の後にはパワーポイントを用いた発表会も行いました。後期も引き続き、オンライン講義がメインとなりますが、週に一度、対面式の実験日があります。大変な時ですが引き続き頑張りたいと思います。

(文責：応用バイオ科学科准教授 小澤 秀夫)



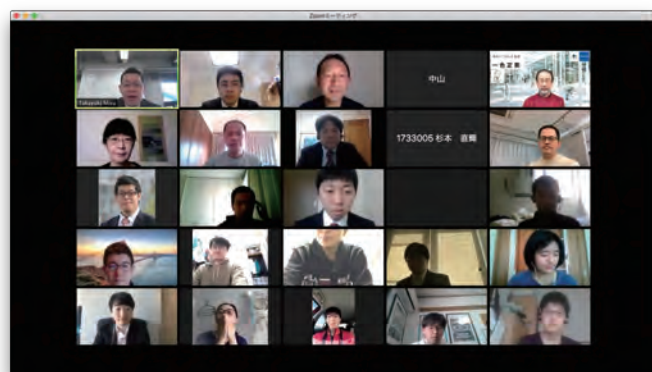
1年生の実験授業の様子

TOPICS ホームエレクトロニクス開発学科

オンライン卒業記念会を開催

11月8日、2019年度卒業生のためのオンライン卒業記念会がZoomを用いて行われました。ホームエレクトロニクス開発学科同窓会の大谷昌生会長(現：博士後期課程 金井研究室所属)のご協力により2019年度生以前の卒業生も参加することになりました。幾徳学園同窓会の中山裕之会長からメッセージをいただき、従来の学位記授与式と変わらない雰囲気の中、挙行されました。参加した卒業生の中村龍一さん(現：富士航空電子株式会社勤務 2019年度三栖研究室所属)は、「このような会を開催して頂き、先生方や大谷会長に感謝申し上げます。新型コロナウイルスの感染が落ち着き、学園祭が開催されたら是非参加させていただきます」と話していました。休日の中、参加いただいた皆様には感謝申し上げます。

(文責：ホームエレクトロニクス開発学科教授 三栖 貴行)



参加いただいた卒業生の皆さん

TOPICS 情報工学科

情報工学科卒業研究中間発表会が開催されました

情報工学科では、卒業研究の一環として中間発表を実施しています。中間発表では、卒研生は、取り組んでいる研究の提案をポスターにまとめ、その内容を、指導教員とは別の教員に説明し、アドバイスを受けます。説明を受ける教員は、テーマで設定された課題、課題へのアプローチの妥当性、関連する研究の調査状況、また、それまでの進捗状況を聞いて、学生がより良い卒業研究を行えるようにアドバイスをします。今年度は従来を踏襲しつつ、大学の行動指針レベル2に対応し、3密を避けるため9月24日から30日の1週間にわたり卒研生105名が分散して発表を行いました。遠隔地にとどまらざるを得ないなど事情のある学生は、Zoom等を利用して発表を行いました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、指導教員や研究室の仲間との対面での研究活動が制限されていますが、4年間の集大成である卒業研究を満足したものとするよう引き続き頑張ってもらいたいと思います。

(文責：情報工学科准教授 川喜田 佑介)



他の研究室の指導教員に説明を行います

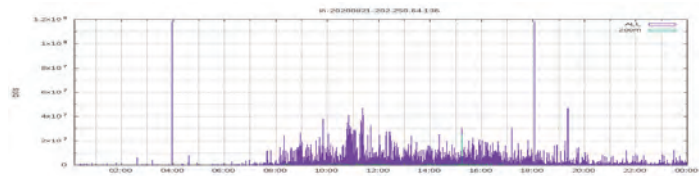
TOPICS 情報ネットワーク・コミュニケーション学科

本学ネットワーク調査での学生の活躍

コロナ禍において、本学でも前期はほぼ全ての授業がオンラインとなり、Zoomと呼ばれるテレビ会議システムが多く利用されました。音声も映像も送受信するZoomの利用は当然ながらネットワークに負荷をかけます。Zoom講義が同時並行に複数実施された場合、ネットワークの圧迫・遅延の懸念が生まれるわけです。そこでまず、「ネットワーク解析」が必要になります。道路の渋滞予測のために交通量調査が必要なことと似ています。

本学科4年生の柄澤亮太さん、2年生の岡本李輝さんがこれらネットワーク調査で活躍しました。本学科丸山研究室及び樋口講師の指導のもと、Zoom講義が実際に行われている8月にトラフィックを分析。実際に流れているデータの中からZoomに関するものをピックアップする点に試行錯誤したとのことですが、データ量の把握とグラフ化を実現させました。これらの成果は「ミーティングコネクタ」と呼ばれる分散の仕組みの導入に生かされるとのことです。

(文責：情報ネットワーク・コミュニケーション学科教授 岡本 学)



学生が行ったトラフィック解析

TOPICS 看護学科

看護学科の近況について

看護学科では、4月に6期生となる1年生82名を迎えました。6月には実習着に袖を通し、看護学生として初の病院実習を行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症により、やむを得ず延期となっています。現在は演習(シーツ交換やバイタルサイン測定など)に取り組み、一步一步「看護専門職への道」に近づいています。オンラインの講義では戸惑いや不安もあったようですが、現在では対面式授業を通じながら、大学という場で看護を学ぶことの大切さや仲間づくりによる自己成長を感じているようです。

臨地での看護実習は、実習病院との連携を図り、十分な感染予防の対策を講じながら、できる限り患者さんのもとで学べるよう工夫してまいりました。2年生は1年次の基礎科目を基盤に、疾病治療学や薬理学などの専門科目を学び、基礎看護学実習Ⅱで看護過程や看護技術を修得しています。3年生の領域別実習では実習期間や実習時間の短縮、学内実習への変更もありましたが、実習を積み重ねていくことで看護する喜びから、看護学生としての大きな成長を感じ取れます。4年生は、すべての実習を終え、看護研究、2月の国家試験に向けて準備し、集大成として臨めるよう取り組んでいます。

学生の努力の成果に、ご期待ください。

(文責：看護学科講師 田代 誠)



学内での実習の様子

TOPICS 情報メディア学科

日本音響学会秋季研究発表会で学生が発表を行いました

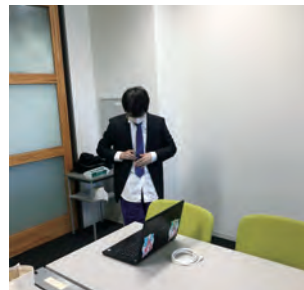
9月9日～11日の3日間、日本音響学会秋季研究発表会がZoomによるオンライン形式で開催され、本学科から7名の学部生が研究成果を報告しました。コロナ禍で様々な制限がある中、国立の研究所や企業・他大学・他学科との共同研究のミーティングは全てオンラインで行われました。また、研究内容もコロナ禍だからこそできる様々な取り組みに手法を変更して外出が制限される中、学生はとてもしっかり頑張っていました。

発表を行った学生は全員初めての学会発表でしたが、「質疑応答にうまく応えられずに悔しい思いをしたので次こそ頑張りたい」「参考文献を読んでいた先生方に質問されて嬉しかった」など、一様に達成感が得られているようでした。

学部生からの学会発表には賛否があるかと思いますが、昨年よりプレ卒研が3年後期からとなり、4年生の姿を見てきた学生たちは自ら秋(9月)の学会発表を志願しそのための準備を進めてきました。また来春の音響学会もトライしたいと話しており、これまで踏み入れたことのない研究の世界で少しでも達成感を感じてもらいたいと思います。

音響学会は、海外からも認められた学術性の高い伝統ある学会で敷居が高いともいわれていますが、近年は音響分野の活性化のため、執行部をはじめとして参加者の多くは学部生や高専生など学生会員の積極的な発表を推奨しています。

(文責：情報メディア准教授 上田 麻理)



スーツに着替え準備を進める学生

TOPICS 管理栄養学科

日本咀嚼学会学術大会で学生が発表を行いました

日本咀嚼学会第31回学術大会(開催期間：10月24日～11月20日)がオンラインで行われ、本学科澤井明香研究室の4年生の学生、小野みゆきさん、篠原宙さん、竹田瑞希さんの3名が、それぞれ発表を行いました。

発表テーマ例：「咀嚼

の有無や偏った栄養比率が課題時の脳血流の時間経過に及ぼす影響」

コロナ禍で3月から大学は入構禁止となりましたが、学生達は人が対象である朝食摂取の実験は、ほぼ終えており、測定した心電図や眼電図、脳血流を自宅で分析しました。実験後のデータ解析については、例えば脳血流は4秒毎に結果が出て、14種類もの電極の動きを一度に見るので、気の遠くなりそうな細かな作業です。このため例年ならば談笑を交え研究室でデータをシェアして取り組みますが、今年はデータ分割は難しかったため、個別遠隔指導で分析する一方、挫けないように仲間の顔や作業状況をZoomで確認し、お互いの気持ちを共有しながら進めました。後期からは研究室の仲間にも頻繁に会い、努力が実を結び発表に至りました。

(文責：管理栄養学科准教授 澤井 明香)



発表を行った学生

新入生ガイダンスを実施しました

9月2日、6期生となる新入生を迎え、新入生ガイダンスが実施されました。新型コロナウイルス感染症の影響で、入学から5か月経って初めての入構となりました。初めに学科教職員の紹介の後、学科での4年間の学習の流れと臨床工学技士の仕事内容に関して説明がありました。休憩の後、クラスごとにクラス懇談会とキャンパスツアーを行いました。クラス担任から質問をしても、全員マスクをした状態で、ソーシャルディスタンスを取って、実際に会うのは初めてという状況では、なかなか発言しづらい雰囲気でした。新入生の皆さんも緊張していたのではないかと思います。それでも、学科のガイダンスが終了して昼休みになると、昼食を一緒にとったり、話しかけたりしている姿が見られました。教員が話す時間よりも、コミュニケーションがとれる休み時間の方が大切だと感じました。想定外の大学生活のスタートとなりましたが、後期になって対面で実習も始まりました。少し時間がかかるかもしれませんが、6期生が一丸となってコロナ禍を乗り越えましょう。

(文責：臨床工学科教授 松田 康広)



臨床工学実習室など学内を見学しました

KAITニュース

情報ネットワーク・コミュニケーション学科の学生が奨励賞を受賞

10月9日にオンラインで開催された電子情報通信学会インターネットアーキテクチャ研究会で、情報ネットワーク・コミュニケーション学科4年の石岡朋紘さん(丸山研究室所属)が「インターネットアーキテクチャ研究会学生研究奨励賞」を受賞しました。

講演名「SRv6を用いた大容量リアルタイムサービスチェイニングの実現」

この賞は、インターネットアーキテクチャ研究会において学生が発表した研究・論文のなかで、その内容が優秀であり今後の発展が期待できるものに対して贈られるものです。



電気電子工学専攻の大学院生が「IEEE ICCE」で最優秀ポスタービデオ賞を受賞

大学院電気電子工学専攻博士前期課程2年の石川拓実さん(山崎研究室所属)が、IEEE ICCE 2020 Best Poster Video Award (Viewer's selection) で、最優秀ポスタービデオ賞を受賞しました。

石川さんは「歩きスマホ撲滅」を目指し、画面視認が不要になる地図ナビゲーションアプリとして「Fun'iki Navi」を開発。Fun'iki NaviではGPS、Googleマップと連携したナビゲーション情報を「雰囲気メガネ」の光色と点滅で表現することで、スマホの画面案内が不要になる道案内を実現しています。



コンピュータセキュリティシンポジウムで、情報ネットワーク・コミュニケーション学科の学生が「学生論文賞」を受賞

10月26日～29日に開催されたコンピュータセキュリティシンポジウム2020(CSS)で、情報学部情報ネットワーク・コミュニケーション学科3年の赤羽秀さんが「学生論文賞」を受賞しました。

発表題目：シンボル情報が消去されたIoTマルウェアに静的結合されたライブラリ関数の特定

マルウェア解析ではマルウェアが使用する関数が解析の重要な手がかりになります。しかし、IoT機器を感染するマルウェアのほとんどにおいて関数の情報が消去されているため、関数レベルのマルウェア解析が困難でした。そこで、関数レベルの解析を支援するため、関数を特定する仕組みを提案して、収集したすべての2,148検体の関数を特定することに成功しました。



情報工学専攻の大学院生が情報処理学会で山下記念研究賞を受賞

大学院情報工学専攻博士前期課程2年の島悠輔さんが2019年度情報処理学会デジタルコンテンツクリエーション研究会で、最も優秀と認められる研究に選定されました。

2021年3月開催予定の情報処理学会第83回全国大会で、表彰される予定です。

発表論文「敵対的生成ネットワーク(GAN)を用いた似顔絵生成手法の検討」

顔画像を入力すると人工知能(AI)がプロのイラストレーターが描いたような似顔絵を生成するシステムについて検討しました。具体的には顔画像とプロのイラストレーターが描いた似顔絵のペアを200人程度とデータセットを準備し、人工知能の中でも画像生成に用いられる敵対的生成ネットワーク(GAN)を用いて、少ない枚数でもイラストレーターのタッチで描けるように学習を行う手法について検討を行いました。

卒業生の活躍

分身ロボットで 「できない」を「できる」へ、 新しい出会いと働き方変革

大学時代の研究が元になり、将来へつながる

高校時代に芽生えた家電製品への興味から、「家電を学ぼう」と思い、神奈川工科大学ホームエレクトロニクス開発学科へ進学。4年次、テレグジスタンスロボット(以下:分身ロボット)に顔パーツを用いて個人特徴を表出させるという卒業研究に取り組み、コピーロボットのように誰かに似せる機能を付けるイメージで、分身ロボットについて学び、ロボットに興味をもつようになり、この研究をより深めたいと大学院へ進学しました。

この研究が元になり、展示会で「分身ロボットOriHime」を開発するオリィ研究所を見つけ、非常に興味をもち、新卒を採用しない会社でしたが、直接連絡し、大学院2年次からインターンとして週1回通うようになって入社。代表の右腕として働き始めました。

私が成長した大学時代の三つの学び

神奈川工科大学時代に、私が成長した学びは三つあります。まず、「講義」での学びです。中でも家電の分解、オリジナル家電の制作、企業連携プロジェクトは印象的でした。学科の講義から、電気や機械、プログラミングの幅広い知識を学ぶことができました。二つ目は「モノづくり」です。KAIT工房を利用し、工房スタッフからものづくりの基礎を教えていただき、現在のエンジニアへのきっかけになりました。三つ目は上記で触れた学部の卒業研究と大学院時代の「研究」による学びです。これは現在の仕事で大きく活かしています。

分身ロボットが当たり前にある世界を目指したい

現在は、重度障害者など通勤して働くことが困難な方が、リモートコントロールすることで働ける分身ロボット「OriHime-D」の開発に携わっています。「OriHime-D」を操作し、肉体労働を伴う遠隔就業を可能とした取り組みとして期間限定の分身ロボットカフェを2018年から3回開設。カフェ常設化を目標に、ハード・ソフト両面で改良を続けています。

「OriHime-D」を実際にALS(筋萎縮性側索硬化症)患者や、重度障害者に使用していただき、感謝されることが遣り甲斐になっています。「OriHime-D」の開発により、多くの方々の「孤独の解消」を実現できていることが目に見えるのでとても嬉しく感じます。

分身ロボット「OriHime-D」をより多くのユーザーに提供できるようにするため、コミュニケーションロボットやテレグジスタンスロボットが定着するような世界を目指したいです。そのためには、もっと勉強をし続けていきたいです。

後輩へ一番に伝えたいのは「興味があることに挑戦する!」こと。未経験でも臆せずに様々なことに挑戦すれば、自分自身の視野も広がり、きっと将来につながるはずです。



武内 一晃 さん

株式会社オリィ研究所 R&D(研究開発)エンジニア
神奈川工科大学 共同研究員(コミュニケーションロボティクス研究室)

創造工学部ホームエレクトロニクス開発学科 2016年3月卒業
大学院電気電子工学専攻 博士前期課程 2018年3月修了

本学の卒業生は様々な分野で活躍しています。今号では、仕事とプライベートの面で社会で活躍する2名の卒業生を紹介します。

「何かしないと何も変わらない」 だから「自分が動く！」 そして広めたい

自然があふれる北海道で育つ。環境保全に取り組みたい

北海道札幌市で生まれ、周りには自然があふれて、アウトドア全般、特にキャンプが好きで、環境保全に取り組みたいと考えようになったのが今の活動の原点かもしれません。生物化学や環境化学系の勉強をしようと、神奈川工科大学応用化学へ進学。4年次には外部卒業研究制度を利用し、横浜国立大学で水質分析について研究し、環境調査もしました。その後、神奈川工科大学へ戻り、大学院へ進学。環境にやさしい自然素材の殺菌材を研究しました。

ゴミ山の上に座る笑顔の少女の本と出会う

大学院修了後に勤務した大手食品メーカーでは毎日大量に廃棄される食品を目の当たりにし、環境保全に取り組みたい私の思いと逆行していたことや、激務による心身の疲弊により2年で退職しました。自己啓発の書籍を探る中で、ゴミ山の上で笑顔の少女が表紙になっている本と出会い衝撃を受けて、その後、フィリピンのボランティアツアーに参加。幸せの価値はモノの豊かさではないことに気づきました。建設会社にて環境にやさしい建設資材の営業に4年間従事しますが、2017年に退職。スカウトを受けて現在は、プラント施設のメンテナンス会社に勤めながらボランティア活動に従事しています。

ゴミ拾いをスタート! ボランティア団体を立ち上げる

転機は2018年の夏、ウミガメの鼻にストローが刺さっている動画でした。ショックを受け「何かしないと何も変わらない」と痛感。環境保全への意識を思い出し、翌日から豊洲市場の周辺で、一人でゴミ拾いをスタートし、ビフォー・アフターをSNSへアップし始めました。コツコツ続けていると誰かが見てくれているものです。「自分が動く」、行動しなければ変わらないので、仲間を集めてより多くの人の目に留まる行動をしようと、2019年1月にボランティア団体「エシカル アクション」を立ち上げました。最初は友人だけでしたが、お台場でゴミ拾いをし、ガンダムの前で撮影をした写真をSNSに上げたところ、その後の活動には、未知の人も参加するようになり、少しずつ増えていきました。またダイバーとして海中のゴミ拾いや藻場の再生活



安江 省吾 さん

ボランティア団体「エシカル アクション」代表
辰美産業株式会社 東京営業所 所長

工学部応用化学科 2009年3月卒業
大学院応用化学専攻 博士前期課程 2011年3月修了
(現：大学院応用化学・バイオサイエンス専攻)

動を行い、見えない海の中の現状を「見える化」し、多くの人に「自分ごと」を伝えていくのも使命だと思っています。コロナ禍に新しい活動も始まり、オンライン授業を開き、子供たちにSDGsや海洋問題を伝えています。「難しい内容を小学生にも理解できるように伝える」は、大学の恩師の教え。仕事でも、オンライン授業でもその教えを活かしています。今後は、あらゆる世代や業界と連携し、社会課題の解決につながる活動を続けていきたいです。



活動2回目。お台場での様子



活動を重ねていき参加者が増えていった



ダイバーライセンスを取得。海中のゴミ拾いも行う

学生の発想力を拡張する 「KAIT広場」が竣工

2020年12月、神奈川工科大学の新たな施設となる「KAIT広場」が誕生しました。約4,100㎡もの敷地は緩やかな斜面となっており、その上には80m×50mの天井が柱もなく、まるで浮かぶかのように存在する。他に類を見ないこの施設を手掛けるのは「KAIT工房」と同じく、いまや各国で注目プロジェクトを手掛け、世界的建築家である石上純也氏。学生のための多目的な広場として設計された施設のコンセプトや、想いについて石上氏にうかがいました。



研究室やフリースペースなど、考えを巡らせることができる空間が大学にはいくつかあります。KAIT広場でめざしたのは、そこに居ただけでリラックスしてより深く自分の考えに潜り、空間がもたらす他にはない感覚から新たな発想が刺激されるような施設です。

全体では約4,100㎡という巨大な構造物ですが、一方で天井高は約2.4mと一般的な住宅や校舎と変わらないスケールです。その天井には所々に四角い開口部を設けていて、晴れていれば時間によって光の濃淡が感じられ、雨の日にはシャワーのように雨水が差し込みます。屋外で空や風を感じながら物思いにふける経験は誰にでもあると思いますが、時に自然は人間に対してスケールが大きすぎる。そんな自然を人間のスケールでつくられた屋内空間



に取り入れることで、自分のいる空間と自然が共存しているような新たな感覚を得ることができるのです。この感覚が学生の感性を刺激し、新たな発想のきっかけとなることを期待しています。

また地面がゆるやかな傾斜となっているのも特徴のひとつ。置かれたベンチに座るのではなく、好きな場所に腰掛けたり寝転んだり、ここではより思いのままに時間を過ごすことができます。もちろんイベント等でも活用できるのですが、他にないこの空間をどのように使うのかという点でも、学生のクリエイティビティは多分に刺激されるでしょう。

建築物は建築家が当初想定している機能を超えて進化していくもの。KAIT工房も完成から10年以上が経ち、完成当初より良い建築物になってきたと嬉しく感じています。KAIT広場もまた同様に、学生のクリエイティビティと共に進化するはず。学生の皆さんにはぜひこの瞬間、この環境だからできるものづくりと向き合ってもらいたい。KAIT広場で得られる新たな刺激を、そのひとつとして活用してもらいたいと思います。

KAIT広場

イタリア・シエナのカンポ広場のように美しく個性的な広場です。床面は、カンポ広場と同様に湾曲した斜面となっており、広場の上には大きな鉄板の屋根面が掛け渡され、空間全体を覆い尽くしています。雨の日でも晴れている日でも、心地の良い屋外の環境の中で活動を行うことができます。決まったことは何もなく、学生が自由な発想で、さまざまな活動を生み出していく新しい環境です。



設計者

建築家 石上 純也 氏 (石上純也建築設計事務所代表)

profile

1974年神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科建築科修士課程修了。妹島和世建築設計事務所を経て、2004年、石上純也建築設計事務所設立。日本建築学会賞、第12回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞など多数受賞。2012年文化庁長官表彰(国際芸術部門)、2019年芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)受賞。

Office Information

オフィスインフォメーション

経営管理本部

管財課

神奈川工科大学ECO推進チームみどりの活動

新型コロナウイルス感染防止のため、各クラブ・サークル活動ができない状況でしたが、9月より「チームみどり」は感染防止対策をとって、短時間の活動を開始しました。最初の活動は、屋上花壇の整備作業で、除草及び花の苗の植え付けを実施しました。今後も、3密を避け、ECOキャップ収集、大学周辺のゴミ拾い等の活動等を行っていく予定です。



学生支援本部

教務課

今後の主な予定

■後期授業関連

年内授業最終日：12月26日(土)
冬期休業期間(事務室閉室)：12月27日(日)～1月5日(火)
補講日：1月6日(水)～1月8日(金)
授業再開：1月12日(火)
後期授業最終日：1月25日(月)
定期試験予備日：1月26日(火)～1月29日(金)
※新型コロナウイルスの感染状況により変更する可能性があります。
■学位記授与式・卒業式：3月20日(土)
※新型コロナウイルスの感染状況により中止する可能性があります。
※開催可否については、3月上旬に決定する予定です。

教職教育センター

令和3年度採用(令和2年度実施)教員採用試験結果(最終結果 11月6日現在)

今年度の教員採用試験における本学の学生及び卒業生の一次合格者は「表3」の通りです。公立学校の一次合格については21名となり、その内現役での合格者数は昨年と同じく9名、最終合格者は現役・卒業生あわせて10名で、うち現役が3名でした。ついに栄養教諭の採用で初の合格者が出ました。

()内は昨年

表1 職種別受験者数 57(74)	職種	人数	受験教科	
	中学	18(23)	数学	9(9)
			理科	5(7)
			技術	4(7)
			工業	9(12)
	高校	37(45)	理科	16(22)
			数学	7(7)
			情報	5(4)
			栄養	2(5)
	小学校	2(6)	他	0(1)
57(74)				

※57=11(現役生)+46(卒業生)
※昨年 74=22(現役生)+52(卒業生)

表2 受験都道府県 59(78)	都道府県	人数
	青森	1(0)
	山形	1(0)
	秋田	1(1)
	岩手	1(1)
	福島	0(1)
	栃木	0(0)
	茨城	0(0)
	群馬	1(2)
	埼玉	1(2)
	さいたま市	0(1)
	千葉	1(1)
	東京	1(1)
	神奈川	39(49)
	横浜市	1(1)
	川崎市	2(3)
	相模原市	0(1)
	山梨	0(3)
	新潟	0(1)
	新潟市	1(1)
	長野	1(2)
	静岡	4(4)
	浜松市	1(1)
	岐阜	1(1)
	高知	0(0)
	宮崎	1(1)
	延べ数	59(78)

表3 神奈川工科大生の状況(一次)			
一次合格者数 21(19)	教科等	人数	合格県内訳
	技術	3(4)	神奈川 1 新潟市 1
	中学数学	2(1)	神奈川 2 静岡 1
	中学理科	3(1)	神奈川 2 山形 1
	高校数学	1(0)	神奈川 1
	高校理科	4(4)	神奈川 3 横浜市 1
	情報	2(0)	神奈川 2
	工業(機)	4(5)	神奈川 2 川崎 1 宮崎 1
	工業(電)	1(3)	神奈川 1
	栄養	1(1)	秋田 1
	小学校	0(0)	
	計	21(19)	神奈川 14 他 7

現9、卒12
※昨年 現9、卒10

表4 神奈川工科大生の状況(二次)			
二次合格者数 10(12)	教科等	人数	合格県内訳
	技術	3(2)	神奈川 1 新潟市 1
	中学数学	2(0)	神奈川 2 静岡 1
	中学理科	1(1)	山形 1
	高校数学	1(0)	神奈川 1
	高校理科	0(2)	
	情報	0(0)	
	工業(機)	1(4)	神奈川 1
	工業(電)	1(3)	神奈川 1
	栄養	1(0)	秋田 1
	小学校	0(0)	
	計	10(12)	神奈川 6 他 4

現3、卒7
※昨年 現6、卒6

学生課

保護者の皆さまへのご案内

本学ホームページ「保護者の皆様」の個所に「父母説明会にかえて」としまして新型コロナ感染症関係・学生相談室等利用方法・学内施設利用方法について説明を掲載しております。ぜひご確認ください。

学生相談室より

収束の兆しどころか、第三波到来と言われ感染者が急増している新型コロナウイルス感染症。異例な学生生活が続き、先行きが見通せない状況に、疲れ、不安、孤独、恐れそして孤独感などからメンタル面に不調を感じる学生は少なくありません。学生相談室を遠慮なくご利用ください。対面相談、電話相談(Zoom利用、E-mail利用を含む)により状況に応じて相談業務を行っています。保護者からの相談も受付けています。

【相談のお申し込み方法】

相談希望の方はメール、またはお電話でお申し込みください。尚、お急ぎのご相談の場合は直接ご来室ください。学生相談室(K2号館3階)

電話 046-291-3038 E-mail sodan@kait.jp

開室時間：平日9時～17時

学生サポート室より

後期に入り、オンライン授業(リアルタイム方式、オンデマンド方式)に加え対面授業も始まりしました。課題提

出等のスケジュール管理や生活リズムの維持に苦労している学生も少なくありません。学生サポート室では、学生生活を送る上での困りごとの解決に向けたサポートを行っていますので、お気軽にご相談ください。また、障害のある学生の支援の相談も学生サポート室が担当しています。

【相談のお申し込み方法】

相談希望の方はメール、またはお電話でお申し込みください。尚、お急ぎのご相談の場合は直接ご来室ください。学生サポート室(K2号館3階)

電話 046-291-3106 E-mail support@kait.jp

開室時間：平日9時～17時

キャリア就職課

2022年卒対象 企業説明会・就活セミナーの予定

<企業説明会>

業界説明会 2月8日(月)～10日(水)／2月16日(火)～18日(木)／2月24日(水)～26日(金)

(180社参加予定※17:00～オンラインLIVE配信)

合同企業説明会 3月平日(月)～(金)の毎日

(240社参加予定※学内対面形式・オンラインLIVE配信)

<就活セミナー>

地方就職県別セミナー 12月18日(金)※17:00～ オンラインLIVE配信

前半：Uターン等、地方就職のためのセミナー

後半：就職協定県など。県別に分かれたセミナー

(岩手、秋田、宮城、山形、福島、茨城、栃木、群馬、山梨、長野、新潟、静岡、その他)

「合同企業説明会の歩き方」講座 1月28日(水)・29日(木)

*学内対面形式

公務員試験対策講座：オンデマンド配信

本学・ハローワーク厚木コラボ企画(就職活動特別支援協定)

就職活動用 健康診断【就活生必須】1月28日(水)・29日(木)

※例年、学内で行っていた「履歴書用写真撮影会」は、今年度は実施いたしません。

就職・キャリア総合サイト「KAITCareer」のアドレスが変わりました。新アドレス：https://career.kait.jp

2020年度「認定看護管理者教育課程」開講

実務経験が通算5年以上ある看護師対象の、看護管理者の資質と看護の水準の維持及び向上を目的とした「日本看護協会認定 認定看護管理者教育課程ファーストレベル」を本年度も「神奈川工科大学看護生涯学習センター」(*)にて開講いたしました。

開講式は、10月16日、本厚木駅から徒歩5分の神奈川工科大学ITビルにて受講者41名の皆様の出席で挙行されました。

本学からは、小宮学長、河野常務理事、新実看護生涯学習センター長 他が臨席し、祝辞・訓辞を述べられた後、早速、ガイダンス及び講義がスタートしました。

なお、昨年度の受講者は19名で本年度の受講者は倍増となりました。

来月1月15日まで、合計22回の講義・演習を、学校教育法に基づく「履修証明プログラム」(*)として実施いたします。

今年度は、新型コロナウイルス感染防止対応のため、22回中16回はオンライン受講となります。受講者の主任・師長等の看護管理者の皆様は、特に新型コロナウイルス等の厳しい医療対応の中での教育課程の受講という大変な努力と苦労があると思いますが、無事修了されるよう、大学としても応援しています。

*神奈川工科大学看護生涯学習センター

神奈川工科大学との連携の元、各分野のスペシャリストの講師陣が新しい医療福祉や看護の動向について講義を提供します。

*履修証明プログラム

大学のより積極的な社会貢献を促進するため、社会人等を対象とした一定のまとまりのある学習プログラム(履修証明プログラム)を開講し、その修了者に対し学校教育法に基づく履修証明書(Certificate)を交付致します。

高齢者の健康と生きがいを先進技術で支援

神奈川工科大学 私立大学研究ブランディング事業

神奈川工科大学 私立大学研究 ブランディング事業

学長 小宮一三氏



先進モデル実用化へ全学一丸

生活支援システム 地域住民に体験会

IoT技術・各種サービスの有用性検証

高齢者の健康と生きがい 先進技術で支援

6テーマで要素技術 研究開発

コロナの影響を受けつつも、技術開発は進められている。高齢者の健康と生きがいを支援するための要素技術の研究開発が、神奈川工科大学の先進技術で実現されている。

コンソシアムで実用化を目指す

生活支援システムの実用化を目指す。地域住民に体験会を開催し、IoT技術・各種サービスの有用性を検証している。

日刊工業新聞／2020年11月24日掲載

AI・ロボット・IoTで高齢者生活支援

AI・ロボで高齢者支援

神奈川工大と実用化へ共同体

生活支援システム 地域住民に体験会

IoT技術・各種サービスの有用性検証



神奈川工大内にあり、地域住民が体験できる。生活支援システムの実用化を目指す。

日刊工業新聞／2020年7月2日掲載

eスポーツ分野の研究・教育 地域活性化推進に向けた連携協定を締結

神奈川工科大学 先進eスポーツ研究センター

神奈川工科大

NTT東日本

NTTe-Sports

eスポーツ核にタッグ



eスポーツに関する連携協定を結んだ。左から、NTT東日本NTTe-Sports社長、小宮一三神奈川工科大学学長、中西裕一郎NTT東日本神奈川事業部長。

連携強化、厚木から全国へ

eスポーツに関する連携協定を結んだ。左から、NTT東日本NTTe-Sports社長、小宮一三神奈川工科大学学長、中西裕一郎NTT東日本神奈川事業部長。

神奈川新聞／日本経済新聞／日刊工業新聞／2020年11月19日掲載

地域協働ミーティング

「ウイルス対策を伴う災害避難の現状と取り組むべき課題」を開催

主催：神奈川工科大学 地域連携・貢献センター 共催：神奈川工科大学 地域連携災害ケア研究センター

7月22日、神奈川工科大学 地域連携・貢献センターが主催、地域連携災害ケア研究センター共催による、地域協働ミーティング「ウイルス対策を伴う災害避難の現状と取り組むべき課題」が開催されました。

同ミーティングは、本年4月に発足した地域連携・貢献センターの取り組みで、新型コロナウイルスの感染拡大が心配される中、九州で発生した豪雨災害を踏まえて、小宮学長と小川センター長(本学名誉教授)の「先延ばしせず、即動かねばいけない」という強い思いで急遽企画されました。

当日は、感染防止対策を十分に講じ、本学関係者をはじめ、地域、行政、企業から約20名が地域連携・貢献センター室にて参加。希望者はリモートで聴講しました。

はじめに地域連携災害ケア研究センター長で、日本災害時透析医療協働支援チームJHAT事務局長でもある山家敏彦特任教授(健康医療科学部 臨床工学科)から、7月に発生した九州をはじめとする水害での医療対応についての報告があり、次に、厚木市危機管理課より、風水害時の避難所設備や備品の現状、また、コロナ禍での取り組みや課題などをご説明いただきました。続いて、本学の教員3名から、現在取り組んでいる避難所関連の研究を紹介しました。

<発表内容>

「避難に際してICTの効果的な役割を求めて」

創造工学部ホームエレクトロニクス開発学科 安部恵一 教授
7年前から取り組んでいる「ICTを用いた被災者情報管理システム」の特徴について解説。今後必要となるコロナ禍での避難所管理の課題とICTを用いた解決策についても紹介。

「避難所におけるパーテーションの役割と音響対策について」

情報学部情報メディア学科 上田麻理 准教授
避難所での音響改善に役立つ吸音性能のある簡易パーテーションやダンボールベットの検証実験の結果や課題、また、今後の展開としてサウンドマスキングを用いる方法などを紹介。

「本大学における震災指定避難所の基本的な対策及び感染対策への課題」

健康医療科学部看護学科 杉山洋介 講師
世界基準や住民からのニーズを基にイメージした本学避難所の基本設計と、今後必要となる新型コロナウイルス感染防止対策を講じた避難所設計での課題について紹介。



後半は、厚木市・福祉行政に携わる方々から「要支援者をいかに守るか」という視点で、また、地元2地区の自治会長からは、避難所開設に関する不安などについて、さらにNTT アドバンステクノロジー株式会社まちづくりユニット担当者からは産学官民連携による災害対策の必要性についてのご発言がありました。

最後に、「災害は命を守る行動・・・災害時に人々を救出する様々な問題は新しい技術で乗り越えられる。だからこそ、継続した取り組みや産学官民の連携が必要」と小宮学長にとりまとめでいただき終了しました。

第22回電子ロボと遊ぶアイデアコンテスト 特別大会を開催

11月7日、「第22回電子ロボと遊ぶアイデアコンテスト」特別大会が本学にて行われ、東京、神奈川、山梨の高校6校14チームの高校生が参加。レゴマインドストームを活用したロボットを用いて、ライトレースやオブジェクトの運搬などをテーマとした課題にチャレンジしました。参加した高校生は「第1ラウンド」「第2ラウンド」で挑戦し、得点が満点で、タイムが早かった山梨県立甲府工業高校チーム名「FKS」の1年生の生徒さんが優勝しました。



優勝した山梨県立甲府工業高校の生徒さん



大会の様子

厚木市内5大学の学生が連携メッセージ「Withコロナ時代の大学生へ」を発表

厚木市内の5大学の学生有志により学生向けに作成した、コロナと向き合う共同メッセージの発表が11月26日、厚木市役所企画政策課で行われました。

メッセージの作成は、厚木市と5大学が結ぶ包括協定に基づき設置する「厚木市大学連携・協働協議会」が提案して実現したものです。神奈川工科大学、松蔭大学、東京工芸大学、東京農業大学、湘北短期大学から学生有志9名が参加し、コロナ禍を乗り越えるために自分たちができることを同じ立場の学生達に伝えようとオンラインによる話し合いを重ね、2カ月にわたりメッセージの作成に取り組み、東京農大の学生のデザインによるメッセージポスターが完成。今後、市内の大学・厚木市役所で掲示されます。

